第3章　植 物

真柴　茂彦
今井　　勉
原田　種昌

佐伯の自然

海辺から山までの森

佐伯市の海岸は日豊海岸国定公園の中にあり、佐賀関の関崎～宮崎県美々津に到る日豊海岸のほぼ中央にあります。四浦半島、鶴見半島、仙崎などの豊後水道に突き出した半島と、大入島、大島、横島、沖黒島、屋形島、深島等の大小の島々からの風光明媚なリアス式海岸となっています。複雑な海岸線は動植物にとっては素晴らしい生活場所を提供しています。

ウバメガシ

植物はアコウ、ビロウ、アオノクマタケランなどの亜熱帯系の植物がみられます。また変化に富んだリアス式の岬は、ウバメガシのように生長の良い照葉樹に生育場所を追われた植物が逃げ込むのに適した場所となっています。

アコウの林（大島）

扇状地や、谷部にはアラカシ、タブノキの林が、丘陵地にはイチイガシ、コジイ、スダジイの林がみられます。

背後には祖母・傾国定公園の山々が連なっています。1,605mの傾山を始め新百姓山、夏木山、桑原山など1,000mを越える山々があり、標高1,000mあたりではブナ、ツガ、ミズナラなどの落葉広葉樹林やモミ、ツガなどの針葉樹林がみられ、ヒメコマツなどがあります。水量豊かな番匠川は海と山とをつなぎ、遠い昔より佐伯の人々の生活と深くかかわってきました。佐伯市は県内でも他に例を見ない自然に恵まれた市です。

もう少しくわしく森と植物を見てみましょう

海岸岩上は乾燥に強いウバメガシの林がみられます。林内は乾燥し、トベラなどの低木がみられ、岩上ではヒトツバなどシダ植物が繁茂しています。また、時にまばらにクロマツが点在します。ウバメガシの無い海岸斜面は南側岩場を中心にシャリンバイ、マサキ、ネズミモチなどの海岸低木林が発達しています。斜面の北側や斜面の下部では面積は少ないがハマビワの林がみられます。山の斜面の岩盤が露出し、土壌の浅いところではアラカシ林がみられ、特に谷の岩場の斜面などに多くあります。

トベラ

シャリンバイ

山腹の土壌が安定した斜面ではスダジイの林となります。昭和30年代まで薪の採取場所でありました。現在、燃料がガス、灯油に変わって、木を切ることも少

なくなったので林は次第に自然林に復元してきています。かつて、これらの照葉樹林は開墾され甘薯・麦などの栽培を経て柑橘類の果樹園になりましたが、現在、多くは耕作者の老齢化などで、スギやクヌギの林になり、手入れが行き届かず荒廃した林が多くなっています。

土壌が深く、水分の状態の良い谷に近いところは、タブノキの林となり、林内にノシランやムサシアブミがみられます。山麓では身近な畑を残し、手の届かないところは、多くはスギやクヌギの植林地となっています。

中の谷以南ではかつてフジツツジが多く草原や岩場に自生していました。仙崎公園や高平の公園、彦岳山頂では、古くは草原が拡がっていました。

最近までオキナグサやリンドウ、キキョウがみられ、メガルガヤ、スズサイコ、アリノトウグサなど草原に見られる植物が今も名残をとどめています。上浦や蒲江など林道が山腹を延び、道路斜面に補強のため植え込まれたシナダレスズメガヤやオオウシノケグサなどとともに、外国の植物が入ってきました。たかひら展望公園の遊歩道斜面では大きく伸びたビロウドモウズイカ、キバナウンランなど外国からの植物が入りこみ、花を咲かせて人々の話題となっています。最近はトウコマツナギなど斜面の土留めに殖えています。

気候は温暖で豊後水道を北上する黒潮の影響を受け、海岸部は冬もほとんど霜をみることがありません。そのため多くの亜熱帯系の植物がみられます。これらの植物は、南の国に起源を持つ種類が多く、沖縄、台湾、東南アジアまで分布が広がっています。例えばマルバチシャノキ・イソヤマアオキやハカマカズラ・アオノクマタケラン・ミミガタテンナンショウ・グンバイヒルガオなど蒲江までみられますし、アコウ・ビロウ・モクタチバナ・ショウベンノキは佐賀関半島あたりまで北上しています。また、アロエやブウゲンビリヤ、ハイビスカス、シェフレラが戸外で枯れることなく育っています。

マサキ

黒潮寄せる海浜

コジイの花

ブナ林

植物の分布は主に温度、湿度、光のほか土壌水分によって規制されています。垂直分布についてみれば九州では標高800mあたりまで、カシ、シイ、タブなどの照葉樹が中心で、標高1,000mあたりでブナ、ミズナラなどの落葉樹林となります。山頂帯の林はツクシシャクナゲ、ヒメコマツが岩場にあります。樹林を構成するカシ・シイ・タブノキは日本における常緑の広葉樹の代表です。佐伯ではカシ・シイの林は海岸から内陸部まで広くみられますが、多くは一度切られた跡に再生した二次林です。広葉樹であるウバメガシの林は佐賀関半島南側から海岸沿いに南下し、四浦半島、鶴見半島で最も広く分布しています。蒲

江の仙崎あたりまでみられ彦岳や尺間山の岩場の急斜面にもみられます。

土壌のやや深い山腹や丘陵地の尾根は、スダジイやコジイの自然林が広い範囲にみられ、照葉樹林を代表する日本産のシイは朝鮮半島先端部にもみられます。中国大陸の南沿岸部・台湾などにも似た種類があります。シイの中には果実が長く、樹皮の割れが激しいスダジイと、実が丸く樹皮の割れの少ないコジイがあります。コジイが内陸の丘陵地を中心に分布するのに対し、スダジイは海岸や山地の尾根など、どちらかといえばより厳しい環境にみられます。日本列島でもスダジイの方が北まで分布し、太平洋側は仙台あたり、日本海側で能登半島まで分布しています。これに対し、コジイは伊豆半島あたりまでしか北上していません。

普通、谷や海岸沿いの岩場にはアラカシが優占する林がみられます。アラカシ林はコジイより土壌条件の良くないところに成立する林ですが、市内ではアラカシの生育環境となる海岸の岩場は仙崎以北ではウバメガシの生育地と重なり、ウバメガシ林が多くみられます。ウバメガシ林の発達しないところはシャリンバイの低木林がみられます。仙崎以南ではウバメガシがないためタイミンタチバナ、シャリンバイやマサキ、トベラの林がウバメガシ林に代わってみられます。そのため土壌の浅い岩場に多いアラカシ林は海岸斜面より谷の岩場に分布しています。

ウラジロガシは内陸部ではより標高が高く、土壌の深い谷斜面に林をつくります。海岸部でも、波当津海岸の林のように海の近くにみられます。アカガシは主に標高600mあたりの山腹や尾根にみられます。海岸部では標高の高い山がないので鶴見半島のように300mほどの尾根にあります。

イチイガシは県南の低山地の丘陵に広く分布していたと考えられます。しかし、土壌が深く農耕地や住居地としての人の生活圏と重なったため早くから伐採され、現在イチイガシの林は神社などにまれに残っているに過ぎません。イチイガシは土壌が深く適湿な場所を好むため内陸部に多く、堅果はタンニンなどが少なくあく抜きの必要があまりなかったので、飢饉の時代には救荒植物として食料にされた記録もあります。神社では単木ではありますが大きな木をよく見かけます。

照葉樹林より標高の高い600mの麓から1,000mあたりに分布するモミ・ツガの針葉樹は単木としてまれに神社や庵などに植えられたものがありますが、自然の林は宇目の山間部が中心になります。神社の境内にみられる大きなスギやイチョウ・オガタマノキなどは、みな植えられたものです。サカキなども低地は少なく、神社のものは多くは移植したものです。

クサギ

山の岩場や伐採地では、クロマツ・アカメガシワ・クサギ・カラスザンショウ・ネム・マルバアオダモなどの陽樹の二次林がみられます。これらの林は土壌条件が良ければ、やがてシイやカシの林かタブノキの林に移行していきます。

海岸部の日当たりの良い岩場では、シャリンバイ・マサキ・トベラ、タイミンタチバナなどの低木林が発達します。地形的に北斜面の下部にはハマビワの多い低木林となります。

尾根など山頂部の岩場はクロマツが生育します。標高が高くなる内陸ではアカマツが尾根に林をつくります。

人工林は比較的土壌条件の良い集落の周囲や谷部でスギ林が中心です。植林の盛んであった昭和40年代、これまで燃料源として残してきた裏山の雑木林は、石油やガスが薪に取って代わり、燃料としての利用価値がなくなると伐られ、当時の建築ブームもあり、より経済価値が高く成長の良いスギが植えられました。スギの生育に適さない乾燥気味な尾根や段々畑ではヒノキを植えています。さらに、乾燥する斜面や段々畑、時には山麓に、シイタケの原木としてクヌギやコナラを植えています。

山と山の間の谷に沿う小さな扇状地は畑や田となっていたが、ここには水を確保するための池や水路が造られました。ここには湿地に見られる植物が残り、蒲江ではミズネコノオのように他地区ではほとんど見られない植物があります。稲田は水湿地を好む植物がみられます。春の田んぼには窒素肥料とするためレンゲが植えられ、スズメノテッポウ、カズノコグサ、ノミノフスマ、ミミナグサ、スイバなど多くの植物がみられますが、田植えの頃は鋤き起こされ、ならされて水が張られ１度消えてしまいます。その後イネの生長と共にタビエ、コナギ、チョウジタデ、イボクサ、ミゾカクシなどが生え、ミズワラビなどが残っています。

山に入り込んだ谷は水源利用の小型ダムや砂防ダムがあり、日当たりの良い水辺ではタネツケバナやセリ、ナルコスゲがみられ、谷の日陰はセキショウ、ヒメレンゲ、サンショウソウなどがみられます。また日当たりの良い海岸の湿地、川の中流域から、谷の上流まで広くツルヨシが繁茂しています。

畑や路傍にはイヌノフグリやハコベなど多くの種類が四季に咲き分けていますが、近年外国からやってきたオオイヌノフグリ・タチイヌノフグリ・マツバゼリ・アメリカフウロ・ヒメジョオンなどが殖えています。それに県南に次第に多くなっているタチスズメノヒエ、フラサバソウ、コメツブツメクサ、ホソバキンゴジカ、アレチギシギシ、ツボミオオバコなど、帰化植物があります。

Ⅰ　豊かな自然　佐伯を代表する各地の植物

島

深島

蒲江港より９ｋｍ南の海上にあります。南北にくびれ、北に緩い坂道を登るとイソヤマアオキ・ショウベンノキなどの林の向こうに分教場があります。船着き場から東には公民館があり、道に沿う人家の背後に亜熱帯植物のビロウが三本あります。さらに人家の庭に大きな株があり、古くはまだあったが、蒲江の方に持って行ったという話もあります。人家を過ぎ、神社の森の上方を通り、以前は開墾されていた畑跡を通りタブ林の中を行くとやがて展望が開けゴキダケの丘がみえてきます、少し坂道が急になると間もなく灯台に出ます。キキョウラン・ハチジョウススキ・オニツルボなどがあります。

島の中央にある深島大明神社の社叢はタブノキ・スダジイの大木の残る林でヒゼンマユミ・アオノクマタケランがあり良く保存されています。

船着場の周囲は岩場にはオオバイボタ・キキョウラン・ホウヨカモメヅル・サダソウ・ソナレノギクなどがみられます。

屋形島

蒲江湾内の島で周囲３km、かつて西側にハマオモトの茂る砂浜がありました。現在テトラポットの投入により海流が変わり浸蝕され海辺の浜は消えました。このとき浜の入り口にあったコササキビが消滅し、大分県のコササキビは記録だけを残しみられなくなりました。

その後、浜は西側に州のように伸び、この砂浜にハマボウフウ・オカヒジキ・ハマヒルガオがみられます。

海岸林の岩場にはモチノキ・ハマヒサカキ・シャリンバイ・マサキ・トベラの低木林があり、その下にはキキョウランがみられます。

東の端の砂浜にはハマゴウ・ハマエンドウ・ハマヒルガオとネコノシタの群落があります。地区前の浜にはハマボウフウ・グンバイヒルガオ・ハマヒルガオ・オカヒジキ・ツルナ・ハマエンドウ・ハマナタマメ・コウボウムギ・ハマアカザ・ハマボッス・ハマゴウなどにヨモギ・カモジグサ・ママコノシリヌグイ・シロザ・メヒシバなど路傍からの草がいり込んでいます。

沖黒島

蒲江と米水津の境界にある無人島で周囲は岩場で南側は切り立った断崖になっています。

断崖にはビロウが群生します。南の断崖１１本、尾根１、林内１、北のハマビワ林下１本あります。アコウ、モクタチバナ、シャリンバイの低木林があります。東側の樹上にカワウの巣があり年々糞による樹木の枯死でさらに東へ移動していましたが、10年でまたもとの位置にもどりました。島全体が原生林でタブノキ・ヤブニッケイ・ホルトノキ・ヒゼンマユミなどの高木が密生し林の中はノシランが密生しています。

北斜面のハマビワ林の林縁にはハチジョウイノコズチ・ツクシキケマン・オオノマオがあります。

岩場にはハマツメクサ・ボタンボウフウ・イソヤマテンツキ・ソナレムグラ・ヒゲスゲなどの植物があります。灯台への道にはオオバイボタ・アコウ・シャリンバイ・バクチノキ・ハカマカズラがみられます。

沖黒島

タブノキの林内

横島

島は無人島で地横島と沖横島があります。どちらもウバメガシの林があり、古く炭焼きに利用していたということです。沖横島の東側断崖にはビャクシンがあり、豊後水道域の南限として県の天然記念物になっています。

大島の加茂神社

アコウの大木

神社の鳥居の左手に500年ほどは経っているだろうと思われる大きなアコウの木があります。大正11年、京都大学の田代善太郎博士が訪れ「２丈１尺余、最大のもの南北１丈２尺、二又となり大枝は６～７尺、周囲4.5丈。」と書いています。現在では、１ｍの高さで直径２ｍ10cmあり周囲６ｍ44cmです。高さ５ｍあたりで６本に枝分かれしています。

境内の上の社叢には大きなアコウ（胸高直径83cm）が８本ありモクタチバナやノシランが林の中にあります。他に　シロダモ・ヤブコウジ・ハマニンドウなどの木と、テイカカズラ・フユイチゴ・ツルコウジ・ナガバジャノヒゲ・シュンラン・シャガ・ハナミョウガ・コバノカナワラビ・イワヒトデ・ヘラシダなどがみられ県の天然記念物に指定されています。

杜の周囲はタキキビやノアサガオがあり島内にはノアサガオは広く分布しています。ルリハコベは県下では姫島などに記録はありますが、分布の限られる珍しい植物です。

神社林を見てきましたが、杜の木々は次第に少なくなっているとはいえ、立派な社叢が残っている神社が多くありました。神社の杜の木を伐ると罰が当たるというような言い伝えが国内に広く残っています。

アコウ並木

鶴見ではそのような話はどうなっているのか。山との生活が中心でない漁村では山村ほどのタブーはないのではと考えましたが、むしろ鶴見の場合は、神社の杜は大切にされていました。厳しい海に生きる人々の生活には、山村の民より明確に神社の老木を大切にする考えが残っていました。

例えば、台風で神社の木が倒れたことがありましたが、これを切ってかたづける人がなく、老人会が引き受け、神主さんの御祈祷を頂いてはじめてかたづいたという話が残っています。

蒲戸ウバメガシ

半島

四浦半島

蒲戸崎のウバメガシ林

石灰岩とチャートの岩盤が海に突き出した半島でウバメガシの林は半島の岩場を中心に生え、展望台の尾根道に左右から茂っています。ウバメガシは県内では県北にもわずかに出ますが、主に佐賀関以南、蒲江の仙崎あたりまで分布しています。蒲戸崎は豊後水道域では最もまとまったウバメガシ林のみられるところです。福泊のトンネルの上の林は県の天然記念物になっています。

尾根はシャシャンボ、ハドノキがみられ、カワラヨモギ、ヒキヨモギなどがあります。急斜面はエノキ、アキニレ、ハマビワなど、下の岩場はフジナデシコ、ソナレムグラがめだちます。

暁嵐の滝

滝の両岸は切り立った断崖が続いています。亜熱帯植物のアコウがあり幹より気根を伸ばしています。特に入口のアコウは大木でしたが台風で一度折れましたが現在また生成しています。岩の上にはケイビラン、セッコク、サイゴクイワギボウシ、タマシダ、ヒュウガトウキなどがみられ岩上植物群として県の天然記念物になっています。

瀬合公園

夏の浜は海水浴場としてにぎわっています。小高い岬の津井公園はシーサイド・プロムナードとして展望台や天体観測施設があります。海岸斜面には神社がありクスノキ、アコウ、タブノキ、ホルトノキの大木があります。公園の周囲の草地に春はネジバナが、夏はシバハギが、秋はノジギクが咲きます。

鶴見半島と鶴御崎灯台

鶴見半島は先端が九州の最東端にあたり、戦時中は豊後水道をにらんだ軍の戦略上の重要拠点として、丹賀や鶴御崎に要塞が構築されていました。そのため、一般の人が自由に半島先端部に近づくことができず、谷部には保存の良いタブノキ林が残っています。断崖はウバメガシの林、灯台付近ではヤブツバキの並木が道に沿ってありニッポウアザミ、オオバウマノスズクサ、岩の上にはツメレンゲがみられます。

鶴御崎

展望台の道には、シオミイカリソウ、ハチジョウキブシ、トキハカモメヅル、ソクシンランなどがみられる、右手はタブノキの林でイヌガシ、シロダモなどがめだちます。

道の両側の斜面にはノジギク、カワラヨモギ、タマシダなどがみられます。６月にはヒメハルゼミの大合唱が聞かれ、７月の夜にはヒメボタルの乱舞が見られます。

波当津海岸　海岸砂丘植物

波当津の砂浜は県南を代表するような素晴らしい場所です。乾いた砂や石原の浜は植物にとって決して住みよい環境ではありません。しかし、ここに長く丈夫な根と厚くて潮風に強く、水分を蓄えることのできる茎や葉を持った植物が、十分な光を得て生きています。オカヒジキ・ハマボウフウ・ハマニガナ・コウボウシバ・コウボウムギ・ケカモノハシ、ハマゴウなど乾燥に耐える仕組みを身に付けた植物がみら

波当津の浜

れます。
　松林のあたりはハマオモト、ナミキソウなどがあり、ハマヒルガオ・ハマエンドウがでます。
　周囲のタブノキの中にはナンゴクウラシマソウやアオノクマタテランがあります。
　岩場にはノジギク、ハマボッス、クサスギカズラ、テリハノイバラ、ヒュウガトウキ、ホウヨカモメヅルなどがみられます。河口の付近はハマナツメがでます。

江武戸海岸

　ハマオモト（ハマユウ）の大群落が海岸にあります。これは屋形島から種を集めてきて殖やしたものです。
　富沢泰氏が江武戸の浜に浜木綿公園化計画をたて、地区の人々と共に植栽したものです。今はすばらしい景観をつくるまでになっています。ハマユウの群落の中にはクルマバアカネ・ボウムギ・コナミキなどが見られます。
　神社の境内にはタブノキ、スダジイの林があります。ホルトノキの大きいものが多くあります。しかし、大きい木だけの保存で、低木や草本は状態が悪くホソバカナワラビがわずかにタブ林のあった面影を残しています。

間越海岸

　砂丘の入口にハイキビの群落があります。クロマツの道はハマオモト、マルバグミが見られます。砂浜はコウボウムギ、ハマボウフウ、ハマゴウ、ハマヒルガオ、ハマエンドウがみられます。砂丘の内側にある潟湖にはヤマトシジミが棲み、岸にはヒトモトススキがあります。

高山海岸と元猿海岸・マリンカルチャー

　高山海岸のように礫浜は砂浜の場合と同じ、ハマエンドウ・ハマヒルガオ・ハマダイコン・ツルナが多くあります。この浜にはグンバイヒルガオもみられます。捨てられたアツバキミガヨランなども花をつけている。すぐ東隣りの元猿海岸は砂浜で亜熱帯から熱帯に分布するグンバイヒルガオが冬の寒さと潮風に耐えて越冬しています。グンバイヒルガオは小浦、屋形島でも記録がありますが冬に枯れます。元猿海岸のグンバイヒルガオの群落は温暖化の影響でしょうか、１5年ほど前から現在まで枯れないで毎年群落が維持されています。群落の周囲はケカモノハシ・コウボウシバ・コウボウムギ・オカヒジキなどがでます。

仙崎

フジツツジ

仙崎のフジツツジ

　毎年ツツジ祭りが行われてきました。地域ではコメツツジとよんでいますが正確にはフジツ

ツジです。佐伯の中の谷以南、宮崎県日向あたりまで分布し、四国と連続しています。県南の山には以前から多くありましたが盆栽として掘り取られ、あるいは植林などにより岩場を残してほとんどみられなくなりました。仙崎のものは自然の状態で切られず、また盗掘にもあわず残った貴重な自然公園です。公園化される前は草原状でクロマツの下にヒサカキ・フジツツジがありましたが、クロマツとヒサカキは切られフジツツジが残されたのです。

遊歩道の周囲にはアリノトウグサ・スズサイコ・メガルガヤなど草原時代の面影を残す植物がみられます。平成11年の春、鹿の食害でまるで除草剤をまいたかのように草がなくなり、新しく侵入したメキシコトキンソウがみられるだけでした。メキシコトキンソウは棘があり、鹿も食べなかったようです。

フジツツジが終わるとサトザクラが咲きます。夏には公園の周囲に植えられたヤマモモが熟します。登り道にはナバガキブシが多くみられます。

たかひら展望公園

マリンカルチャーセンターの背後にある山で仙崎とは峰続きです。立派な自然遊歩道が抜けています。道幅も広く、海が眼下に広がりすばらしい展望であります。遊歩道にはノジギクが殖やされ11月には「ノジギク祭り」が行われてきました。近年鹿の食害でネットをはりノジギクを保護しています。

キバナウンラン

遊歩道はシバハギ・ソナレノギクなどがみられ、路の上の斜面にはイワヨモギ・キバナウンラン、ビロウドモウズイカなどが路側帯の工事の吹き付けの種子に混じり芽を出しています。イワヨモギは日本の東北や北海道から、あとは外国からの帰化植物です。現在のキャンプ場の周囲には以前この地が草原であった名残のアリノトウグサ・キジムシロも残っています。

遊歩道は海側にシロダモ・カラスザンショウ・アカメガシワ・ヤブニッケイ・ハマビワなどが目立ちます。

ビロウドモウズイカ

王子神社の森

蒲江の街を見下ろす位置にこんもりと繁る王子神社の杜はスダジイを優占種とする典型的な海岸型の林です。面積も杜の植物の構成種も県下では他にあまり例を見ないほどよく保存されています。

林内の木はイスノキ、スダジイ、トキワガキ、ツバキ、ヤマモガシ、ムクノキなどと、低木のタイミンタチバナ、林床のノシラン、ムサシアブミなどで花の咲く植物の種類も百種を超えます。

王子神社に来て気づくのは境内にある大きな赤い木肌の大木です、バクチノキと言います。樹皮が剥げ赤い木肌を見せているのを、博打に負け、身ぐるみ剥がれてすっかり裸になった男の赤い肌に例えたものです。

海辺の植物

タイトゴメ

ボタンボウブラ

マルバマンネングサ

ハマナダマメ

ハマボッス

コバノタツナミ

サダソウ

ツルソバ

ハマナデシコ

コオニユリ

タマシダ

浜の植物

ハマイチョウ

ハイキビ

ハマゴウ

ハマダイコン

ハマボウフウ

コウボウムギ

カモノハシ

ハマヒルガオ

ハマエンドウ

ツルナ

ハマヒサカキ

ハマビワ

ヒメユズリハ

山

彦岳

彦岳

標高639.3m山頂には杉の植樹があり、ドーム型の頂は遠くから特徴ある景観となっています。

山頂には現在、彦岳権現が祀られています。以前頂は草原が広がっていたようで、オキナグサ、キクアザミ、リンドウ、ノヤナギ、アリノトウグサ、ヒオウギなど草原に見られる草木が残っていましたが、次第に消えています。中世には城があったことを示す古地図もあります。

尾根はアカマツがありオンツツジがみられます。ウリハダカエデ、ソヨゴ、コミネカエデ、リョウブなどがあり、以前はゴショイチゴの記録がありますが現在は見つかっていません。

尺間山

尺間

標高641m山頂は岩場でその頂に尺間神社があります。８合目まで車で登れます。岩の上にはイワカンスゲ、ヒュウガトウキ、マルバマンネングサ、イワヒバ、ヒメミツバツツジ、シモツケがあり、クロマツやウバメガシもみられます。かつてシャクマスゲと呼ばれたヒメカンスゲやホソバヒカゲスゲが山頂付近にあります。

狩生鍾乳洞

国の天然記念物です。狩生地区の境内にオガタマノキのある王子神社より川に沿い100mくらい上がった左岸の上部にあります。穴の奥は深く150m,38景といわれてきました。現在は入り口が閉じられ鍵が掛かっています。中は縄梯子がないと進めません。ユビナガコウモリ、キクガシラコウモリなどいてチビゴミムシ、カリュウアリズカムシ等の真洞窟性の動物がいます。付近の石灰岩はアラカシ林が中心でシロバナハンショウヅル、オオクサボタンなどがみられます。

佐伯城山

城山

城山は初代の佐伯の殿様である毛利高政によって築かれました。それまでは八幡山と呼ばれ頂に八幡様が祭られていました。高政は八幡様を城山の西側に下ろし、1604年城造りを始め４年で完成しました。城のできたころ登城の道の二の丸下あたりからケヤキを道に沿い植えたようです。

古い城の図では塩屋城、鶴屋城と呼ばれさら

マヤラン

に佐伯城となっています。

元和３年には二の丸炎上の記録があり、殿様は３代高尚より三の丸を御殿にしています。享保11年には城の改修工事をしていますが天守閣は再建されていません。大正７年（1918）独歩碑の道ができました。桜並木植樹（100本）

コジイの森

コジイの花

現在昔のままに石垣が残り、山頂からの佐伯市街、番匠川、豊後水道の眺めも素晴らしく、人々に愛される山として多くの人が散策や体力づくりに登っています。

城山は谷間にスギが植林されていますが、山頂までコジイの林です。コジイは西日本の低山地を代表する林です。このようなシイ、カシ、タブの林を照葉樹林と呼んでいます。シイの木の中にヤブツバキ、タイミンタチバナ、イズセンリョウ等の木がみられ、ベニシダやオオカグマなどのシダ類が林の下にあります。

城山へ登る人々

城があり長い間ほとんど切られなかった城山は、林の中に340種の植物があり、この中には珍しい草木が多くみられます。

森が素晴らしいので、県天然記念物のオオイタサショウウオが生息し、夏はヒメボタルが乱舞して、ムササビの観察もできますし、鹿などに出会えます、このように市街地の背後に素晴らしい森を持つ城山は県内でも珍しい存在です。

城八幡とハナガガシ　弥生祇園神社のハナガガシの森

ハナガガシの林は九州と四国の南にみられる、貴重な林です。佐伯ではその北限にあたり、城八幡では国の天然記念物になっています。林内にはミサヲノキ、サツマルリミノキ、エダウチホングウシダなどの珍しい植物がみられます。

八幡社

海崎大宮八幡社とスダジイの杜

八幡様の社叢とその周囲はスダジイを中心とした林で、タイミンタチバナ、イズセンリョウ、ハマセ

ンダンがみられ、市の天然記念物に指定されています。
ここではオオバヤドリギが常緑樹に寄生しています。

栂牟礼山

標高133.7mの山で佐伯氏の居城でした。山麓、山頂にスギの植林があり尾根は一部コジイの林があります。山頂にはヒオウギ、トウササクサ、ヒキオコシ、ヤマハッカがあります。谷にはスズムシバナが多く、タニジャコウソウ、エゴマなど少なくなった植物が残っています。

桟洞門と石灰岩

本匠地区はあちこちに石灰岩が露出していて、アルカリ性の土壌を好むタチバナとビワなど特徴ある樹木がみられます。
本匠の宇津々に大分県では津久見とここだけのタチバナの自生地がある。神社の石灰岩の岩場の上にあります。アラカシの林の中に４本があります。ところが訪れてみると鹿の皮剥でいずれも傷ついて枯れかかっていました。2011年３月、市が防獣網を巻きました。
石灰岩の岩場はタチデンダ、コミノヒメウツギ、シロバナハンショウヅル、オオクサボタン、ヘッカニガキ、ビワ、キドイノモトソウなどがあります。
石灰岩地の岩壁とその風化土の上にあるホウライクジャクは日本でここだけに生えている貴重な植物です。それもごく限られた個体しかありません。
春には渓流沿いにヤマフジやヤマブキの花が咲き、ミツマタがかわいい花を見せてくれます。エゾヒガンの花もみごとです。５月にはゲンジボタルの乱舞も見られます。
秋には川沿いのイロハモミジの紅葉、アユ、モクズガニの季節でもあります。

小川の滝　銚子淵

明治の文豪国木田独歩が２度にわたり訪れた景勝地で岩にはカタヒバ、イワヒバ、イワタバコ、オオサンショウソウ、カンザシギボウシなどがみられます。周囲はアラカシ林でタラヨウ、ウラジロガシ、サカキなどがあります。

小川の滝

小半鍾乳洞

国指定天然記念物です。小半地区の入り口、石灰岩の断崖の下に口をあけています。奥行き700m以上あります。鍾乳石は豊富です。付近の岩壁にはムクロジュ、バクチノキ、ヤマブキ、シロバナハンショズル、シマカンギクなどがあります。

青山国有林・黒沢ダム

青山国有林は自然林がよく残されています。ここには、トサムラサキのような珍しい植物があります。
山腹のコジイの林にはクロバイが多く、5月頃は白い花がきれいです。
シロバイ、リンボク、イイギリなどがみられ、保育者の樹木図鑑では樹木の写真がここ

でとられています。また、アブラギリ、シナアブラギリが植えられています。

人里と低山の植物

スミレ

ハハコグサ

ヤハズソウ

イヌタデ

ニワゼキショク

オヘビイチゴ

ギシギシ

ヒロハギシギシ

ホナガイヌビユ

ミゾコウジュ

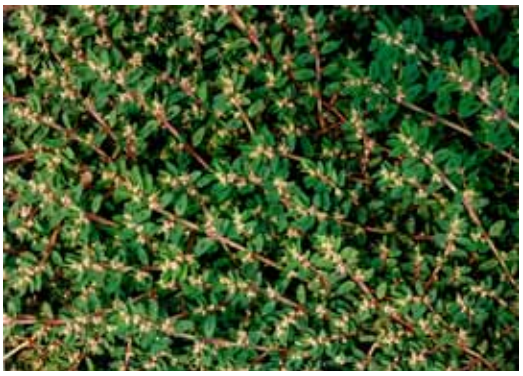
イヌガラシ

タネツケバナ

アカミタンポポ

カタバミ

ウツボグサ


コニシキソウ

キランソウ

ヘビイチゴ

ヘラバヒメジョオン

ナズナ

マメグイバイナズナ

ミチヤナギ

クワクサ

ラゼンソウ

カラスノマゴ

イラクサ

カラムシ

オドリゴウ

ツルニガクサ

ドクダミ

アオミズ

川

藤河内

本匠

樫野

上流域

三国峠が本流の分水嶺となっています。久留須川では　直川ダムの上流、陸地峠、井崎川では尺間山の上流神野地区まで幾筋もの谷が切れ込んでいます。

川原の日当たりのよいところは、水辺からツルヨシが伸びてきて丈は低くなりますが一面に生育しました。周囲の木々が谷に影をつくるところでは子どもの頃、花穂を目ツッパリなどとして遊んだセキショウがでます、山の谷ではナルコスゲが岩の上に生え周囲の湿った壁にはイワタバコが着いています。谷の岩場の斜面には子どもの頃どんぐりで遊んだアラカシの林があります。本匠の楠木のほかに尺間の宇藤木地区にもエドヒガンザクラが谷に沿い白い花を咲かせます。

中流域

ツルヨシが石原に生育し、堰の下では特に多くみられます。増水により河床の礫が動く水辺では春に芽を出し秋には枯れる一年生の草本がみられます。

「タデ食う虫も好き好き」のピリッと辛いヤナギタデが水辺に沿い帯状に生え、秋には赤く色付きます。絶滅危惧種のカワジサも水辺を好みます。

周囲の礫原にはオオイヌタデ、ノゲイトウ、ギシギシ、などがあり、畑や路傍、田などから流れ込んだ雑草の種子が発芽し生育しています。

川の中流域を代表する場所として樫野河原がある。樫野川や堤内川から流れ込みがあ

り、右岸の樫野橋下流域にはムクノキ、エノキ、オニグルミ、ホテイチクなどの川辺林が上流にはエノキ、ムクノキなどの落葉樹とシロダモ、ヤブニッケイなどの常緑樹からなる保存のよい林がみられ、水中にはセキショウモ、ヒシ、ササバモ、フサモなどの水生植物群落があり、豊富な自然には水辺の鳥カイツブリの浮巣もみられます。

また、タコノアシ、ウマスゲ、サンカクイ、キクモ、スズメハコベなどの貴重な絶滅危惧植物が残っています。

また、水辺から離れ乾燥してくるとオギ、マツカサススキ、メタケ、帰化植物のクワモドキなどが生え、木はオオタチヤナギやアカメヤナギが点在します。

樫野川では昔からの水辺の景観が残っています。川口付近にヒシ、その上流にはコウボネ、ハンゲショウなど今は少なくなった水辺植物の群落があり、昔の水辺の面影を残しています。

堅田川中流域は汐月橋の上流から淡水域になると絶滅危惧植物のセキショウモがでます。これが、大分県で番匠川流域だけにしか現在は見られませんが、そんなに貴重なものかと考えるほど多くあります。川の魚を獲る人には、網を打つとモの中に隠れてしまうので全く邪魔な存在だと云っています。

堅田川にはもう１つ大分県唯一の産地であるヒメバイカモがあります。上流域に自然の豊富な青山国有林があり、人家が少なく、清流がこれらの貴重な植物を絶えることなく育んでいると言えます。ヒメバイカモは黒沢川の上流にも以前ありましたが、現在は西野あたりが生育地の中心です。年によって増減が激しく多く群生しているかと思えば次の年にはもう見られないということがしばしばおこります。青山河川公園では湧水があり安定してみられ、他にアキカサスゲ、ナガエミクリ、セキショウモなどがあります。

ホテイチクの林

本流の中流域や井崎川、久留須川などの支流には川沿いにホテイチクの林が残っています。温故知新によると、洪水の対策として佐伯藩の時代から、保護、奨励されてきました。

ホテイチクの林は、地下茎で絡み合った丈夫な根、水流でしなれ折れることのないタケは増水による川の氾濫を防ぎ、溢れても流木やゴミを田畑に入れないようにする、フィルターの働きをしました。

堤防が出来るまでは、重要な働きをしていましたので、地区の人々が管理をして川沿いの竹林は大切に保護されてきました。晩春には竹の子がとれ、ゴサンチクと呼ばれ灰汁（あく）の少ないこの筍はちいさな束にして売買され貴重な収入源となっていました。また地区の人々の食料となりました。久留須川では千股、井崎川ではすばらしい竹林が川に沿ってありましたが現在はほとんど残っていません。

ホテイチク

ヨシ

番匠川河口付近

番匠川口

河口付近川口から1.5km当たり、左岸に砂浜があります。水辺に近いところには乾燥に強い海浜植物コウボウシバの群落がありコマツヨイグサ、オカヒジキなどがみられます。

堆積土が多いところでは、ヨシの茂る湿地帯となり、さらにナンキンハゼやアカメガシワのなどの木が生えノイバラの藪となっています。その上流では水辺はヨシが生育し、川口から３キロ当たりでは砂州に初夏には熱帯地方のハイビスカスを思わせる黄色のハマボウの群落があります。周囲に塩性湿地植物ハママツナ、フクド、ナガミノオニシバ、ホソバノハマアカザ、カモノハシなどが生育しています。

この辺りの土手の斜面にはチガヤやノアザミ、ノイバラの中にシロバナマンテマ、ヘラオオバコ、ツボミオオバコなどの帰化植物が入り込んでいます。

堅田川の入り口付近には水深50cm～１ｍあたりにヨシ群落の周囲にはコアマモの群落が広がっています。

柏江付近のヨシの中にはハマサジやホソバノハマアカザがあります。

汽水域の植物群落は中江川やその支流でフクド、ナガミノオニシバ、ハマサジ、シオクグなどの群生地があり、中江川では河岸をブロックから石組にしたところ塩性湿地植物フクド、ホソバハマアカザが多く復活しています。

藤河内渓谷

花崗岩を深く浸食して流れる清流が優美に続いている渓谷、藤河内の駐車場の下の谷斜面はウラジロガシの林です。谷に沿い伐採を免れたツガやモミの林があり、水辺近くではサワグルミやシオジの林が規模は小さいが残っています。ウラジロガシ、ハイノキ、イヌブナ、アカシデなど常緑広葉樹と落葉広葉樹が混生する。駐車場付近はオオモミジ、イソノキ、ヤマボウシ、フサザクラ、サルナシなどがみられます。湿度の高い林の中ではコケシノブの仲間が岩をおおっています。

ヒュウガギボウシが渓谷の岩場に繁茂していましたが、鹿が食べたのか少なくなりました。他にケイビラン、アキチョウジ、アクシバ、ツルアリドウシがみられます。観音滝までの道はアカマツ、アカガシ、ツガの胸高直径60～100cmほどの大木が残りオオバケクロモジ、ヤハズアジサイ、ヒメシャラ、ホウノキなどがみられ、草ではシコクスミレ、ヒメミヤマスミレ、コミヤマスミレ、ヒメウワバミソウ、テバコモミジガサ、スズコウジュ、シソバタツナミソウなどがでます。

土手・湿地の植物

ヤマアイ

ツルボ

ヒエガエリ

ツルヨシ

ホソアオゲイトウ

カンガレイ

ヤナギタデ

シロバナサクラタデ

アマナ

ノカンゾウ

ヤブカンゾウ

タカサゴユリ

ヒガンバナ

クグガヤツリ

アメリカネナシカズラ

アブラナ

オギ

カワジシャ

コギシギシ

マツカサススキ

ママゴノシリヌグイ

アブノメ

オモダカ

イ

ヒメガマ

ホテイアオイ

ヒシ

ミゾソバ

アキノウナギツカミ

コナギ

コウギヤガラ

イガカヤツリ

ホタルイ

セトガヤ

山

鷹鳥屋のアカガシ林

鷹鳥屋の渓谷側斜面はスギの植林地です。山頂部は神社がありその社叢はアカガシ、ツガの大木があります。アカガシ林は標高600mあたり鷹鳥屋の林はツガ、アカガシは直径80cmほどあります。ウラジロガシ、クスノキ、ホソバタブ、アカシデ、ダンコウバイ、カゴノキなどがみられ、参道の鳥居のそばに直径1～1.5m、樹齢300年を超える杉の大木が並んでいます。

アカガシ

傾山を望む

傾山、新百姓山、夏木山　桑原山

祖母傾山系には祖母山の別名姥嶽のついたウバタケギボウシ、ウバタケニンジンなど固有の植物がみられます。標高1,000mあたりから、谷に近い

モミ、ツガ林は山腹や尾根でブナ、ミズナラの林になります。夏木山への尾根はヒメコマツ、アケボノツツジ、ベニドウダンツツジ、コシアブラ、コミネカエデ、ヤマグルマ、バイカツツジなどが見られます。

新百姓

杉ヶ越から新百姓に向かう尾根の岩場には自生と言われているヒノキの林があります。しかし、藩の時代植林がなされ、岩場のものは生長が悪く、利用されず残ったことも考えられます。現在は尾根のすぐ下までヒノキやスギの植林が迫っています。

夏木山ではヒメコマツ、ツクシシャクナゲ、ベニドウダン、ヒカゲツツジ、ツクシ、アケボノツツジ、岩場はケイビランがあります。尾根や山頂の岩場はヒメコマツ（ゴヨウマツ）、ツクシシャクナゲとなります。

桑原山ではブナの林は下にスズタケが繁っていました。最近所によっては大量に枯れているのがみられます。現在原因の調査などがおこなわれています。

ミズナラ、ヒメシャラ、コハウチワカエデが多く山頂はリョウブ、アセビ、アケボノツツジ、ベニドウダンがあります。林の下はツクシコウモリソウ、バイケソウ、ツクバネソウ、シノノメソウなどがあります。

人里と山地の植物

ゲンノショウコ

ヘクソカズラ

ボンドクタデ

シラネセンキュウ

ハナミョウガ

サツマイナモリ

ヤマムグラ

ハナタデ

シライトソウ

メヤブマオ

マルミノヤマゴボウ

ヤブヘビイチゴ

ヤブニンジン

イガホオズキ

ヤマホトトギス

コアカワ

ナガバヤブマオ

ダイコンソウ

カラスウリ

オカトラノオ

イワタバコ

木

サザンカ

ブンズイ

マルバアオダモ

イヌビワ

ヤツデ

アオキ

アリドウシ

ヤマツツジ

ジャケツイバラ

ツクシヤブウツギ

クマノミズキ

リンボク

ヤマビク

クロガネモチ

ヤマモモ

シロダモ

ヤブニッケイ

カカツガユ

ネムノキ

エゴノキ

イロハモミジ

アセビ

クサキ

アカメガシワ

カラスザンショウ

ミヤマシキミ

ウリカエデ

ヤマボウシ

ヘラノキ

Ⅱ　佐伯市の植物社会

平成17年３月、旧佐伯市と旧８ヶ町村が合併して大分県はもとより九州一広い佐伯市が誕生した。その佐伯市は、海岸部・平野部・山間部と植物社会には顕著なものがみられる。この２年間主な地点を調査し検証してきた。

1.　海岸部における植物社会

海岸部における自然林には、

スダジイ群団		スダジイータイミンタチバナ群集
		コジイークロバイ群集　クロキ亜群集
		アラカシージャノヒゲ群集
		ウバメガシ林
		タブーホソバカナワラビ群集
		ヤブニッケイ林
		アカガシ林
マツ林		アカマツーオンツツジ群集
		クロマツ林
その他の群落	海岸	シャリンバイ低木林
		ハマヒサカキ林
		マサキ・トベラ林
		ハマボウ林
		ハマビワーオニヤブソテツ群集
		ノジギクーアゼトウナ岩上植物群落
		ハマゴウーハマヒルガオ海岸砂丘植物
		ハマウド群落
		イソヤマテンツキ群集
		ナガミノオニシバ群落
		ヒゲスゲ群落

がみられる。

海岸部を代表する林にウバメガシ林がある。ウバメガシ林は、佐伯市では上浦、米水津の海岸線に多くみられ、蒲江では尾浦周辺の海岸に多い。旧佐伯市内ではごく一部にしか出現しない。ウバメガシは、岩場や乾燥に強く、かつては良質の炭材として伐採されていたが、傍芽林として再生するのも早い。ウバメガシートベラ群集ではトベラをともない、ウバメガシーコシダ群集ではフジツツジがみられる。

一方、タブノキの森は土壌が深く、水分の状態の良いところに発達し温暖な海岸部に良い森が多い。深島大明神の背後の森には、タブノキとスダジイの大木は有名である。

保存の良い森では階層構造が発達している。階層構造は光の強いところから林内の弱いところまでを上手に植物が住み分け、森全体として、互いに支えあい、しっかりとした集団構成となっているので環境の変化に強い。

この森では高木層に胸高直径１ｍほどもあるタブノキ、スダジイがあるが、海岸の強い風のためか樹高は20ｍに達しない。他、シロダモやヤブニッケイがある。その下の亜高木層はヤブツバキが多くハマビワと県南海岸の島を中心にわずかに分布するめずらしいヒゼンマユミがある。

低木層には、マサキ、トベラ、タイミンタチバナ、オオムラサキなど海岸に多い木がみられ、これも多くないモクタチバナがある。草本には亜熱帯系のアオノクマタケランがあり、ノシランやムサシアブミがある。

深島大明神のタブノキ林は森の構成種からみて大分県の南端の亜熱帯系の植物が生育する貴重な森として大切に保存してもらいたい場所である。

深島にはヒゼンマユミ、アオノクマタケラン、ショウベンノキ、イソヤマアオキ、シオカゼテンツキ、ハマホラシノブなど亜熱帯系の植物が多い。

米水津の沖黒島の南側の断崖には自生のビロウが群生している。特徴的な植物としてヒゼンマユミ、ハカマカズラ、オニツルボ、オオバイボタ、ハチジョウイノコズチ、キノクニスゲなどもみられる。島全体が原生林でタブノキ、ヤブニッケイ、ホルトノキなどがみられ、林の中にはノシランが密生している。この林の中に穴を掘ってオオミズナギドリが営巣している。南側のアコウ、モクタチバナの低木林にカワウの巣があるのもめずらしい。

2. 平地における植物社会

番匠川河口では、河口砂地特有のコウボウシバ、オカヒジキ、コマツヨイグサなどがみられ、500ｍほど上流にはハマゴウ、ナガミノオニシバ、フクド、ホソバノハマアカザなど塩性湿地植物がみられる。

番匠川樫野上流には、貴重植物のタコノアシ、オギ、マツカサススキ、サンカクイなどがみられる。

佐伯市青山の河川公園（堅田川流域）では、ヒメバイカモ、セキショウモがみられる。この２種は県下でもこの地区しかみられない貴重種である。また、ナガエミクリ、アキカサスゲなどもみられる。

波越の河川敷（堅田川流域）では、ツルヨシ、カナムグラ、ミゾソバなどもみられる。水田にはコゴメガヤツリ、スズメノトウガラシ、コナギなどもみられた。

蒲戸の休耕田で湿地帯植物のミズオオバコ、クサヨシ、ミゾソバ、コシロネがみられた。

城山にはコジイの林があり、その中にはヤブツバキ、タイミンタチバナ、イズセンリョウなどがみられ、ベニシダやオオカグマなどのシダ類など360種ほどの植物が生育している。

3. 山間部における植物社会

宇目地区は、九州の尾根といわれる祖母・傾山系の山々を県境に配し、低地から1600ｍまでの標高差と県内でも有数の広い面積を持ち、植生上、最も恵まれた地域である。代表的な群集や林をみると次のような植生が認められる。すなわち、自然植生と人工林、人里の群生に分けられる。

（1）自然植生

1　ヒメコマツーヒカゲツツジ群集
2　ハリモミ林
3　ブナースズタケ群集
4　ノリウツギーヤマカモジ群集
5　ツガーハイノキ群集
6　モミーシキミ群集
7　シオジーミヤマクマワラビ群集
8　アカガシーミヤマシキミ群集
9　ウラジロガシーサカキ群集
10 アカマツーオンツツジ群集
11 コジイークロキ群集
12 イチイガシ林
13 アラカシ林

（2）人工林・人里の植生

14 スギ・ヒノキ林
15 コナラ・クヌギ林
16 竹林
17 畑
18 田
19 路傍
20 河川

宇目地区を代表して次の植生を紹介する。

鷹鳥屋神社（真弓）

鷹鳥屋神社は、鷹鳥屋山頂近くにあり、山頂と尾根にコジイ、イチイガシ、モミなどの林が残っている。社叢のアカガシ林は保存がよく、県南のアカガシ林を代表する林である。昭和60年に県の天然記念物に指定されている。アカガシの他にタブノキ、ウラジロガシ、クスノキ、ホソバタブ、アラカシ、ヤブツバキ、スダジイ、アカシデ、ヤブニッケイ、クロキ、カゴノキ、イヌガシなど、常緑樹が多い。低木層にはヒサカキ、ネズミモチ、コガクウツギ、リンボク、林床にはヤブコウジ、テイカカズラなどがある。

北西斜面は、スギの造林で尾根に残存林がみられる。

Ⅲ　佐伯市の特徴ある植物

種子植物は、暖帯から亜熱帯までの分布域をもつ特徴ある種類が多く含まれています。

ホウライクジャク

ホウライクジャク（シダ）

日本では佐伯の本匠だけ、わずか２ｍ平方にも満たない所にこのシダが生えています。大正11年頃見つかりましたが、長い間絶えることなく生き続けています。

細い針金のような柄に丸っこい葉をつけます。葉の先に子どもができ地に着いて根を出し殖えます。11月には枯れ５月末に芽をだします。

カマエカズラ

カマエカズラ（クズモダマ　ウイルカンダ）マメ科

この蒲江の名前がついた植物、カマエカズラは現在、葛原の海岸林や山林を覆い繁茂しています。また、波当津の神社の付近にも小群落があります。

その生育を長年見て来たが、南斜面が中心の分布から、地球温暖化の影響もあってか海岸では次第に東北斜面に広がり、ますます隆盛を極めています。

茎の直径は大きいもので20cmに達し、枝は伸び付近の樹木に巻き上がり、樹冠を覆います。葉は先端がとがった長楕円形の３枚の小葉からできています。若いときは金色の毛が多くはえています。花は茎より直接でる花軸に暗紫色で５cmの小型の卵程で、数個から数10個房状にさげます。

幹や枝から一面に下がった花は南方のジャングルを想像させる景観です。実は30cmほどのさやの中に径２cmほどの平らな円形でへそが８割ほどもある豆が５～８個ほど入っています。

随分昔から生育していたと考えられています。古くは馬の餌や綱の代わりに利用されてきました。馬もいなくなり、利用価値がなくなっただけでなく、最近まで杉の木に巻きついて、これを覆うため嫌われて伐採されていました。

2001年３月発刊の「レッドデータブックおおいた」ではクズモダマ（カマエカズラ）とし絶滅危惧種１Ｂに記載されています。

日本本土で蒲江だけと言うことでしたが、今は南のものと同じといわれています。

ノジギク

ノジギク　キク科

蒲江全域の海岸に普通にみられるノジギクも全国的な分布から見ると九州東岸、四国、瀬戸内海から四国と比較的限られています。ノジギクの名前は牧野冨太郎博士が四国のものにつけたものです。海岸が分布の

中心です。花は筒状花と舌状花の集まりで、筒状花は中に円形に集り、めしべを突き出し黄色にみえます。舌状花は周辺に集まり純白です。

ノジギクは葉や花の形が多様で、中間的なものもあります。県内のものは次のように分けています。

葉は五裂	葉は洋紙質	セトノジギク
葉は五裂	葉は画用紙質	ノジギク
葉は三裂	葉は厚く小型	アシズリノジギク

ミミガタテンナンショウ（オキノシマテンナンショウ）　サトイモ科

ミミガタテンナンショウ

県内では現在蒲江でしかみつかっていない植物です。マムシグサの仲間です。マムシグサは青みどり、または黒紫の苞（ほう）は頭を持ち上げたマムシを連想させます。花の名前もこの形からきているのでしょう。花はこの苞の中にある棍棒のような肉穂の周囲に集まってつく。このマムシグサに似るが小葉は大きく幅が広く、５～15に分かれています。長さ10～17㎝。花季はマムシグサより早く三月末から四月初め、７～19㎝の柄のうえに仏焔苞をつけ、筒口は耳形に広がります。仏焔苞は黒紫色。町内は波当津から畑野浦までみられます。この張り出しているところを耳にたとえた、ミミガタテンナンショウとよばれています。

マルバチシャノキ

マルバチシャノキ　ムラサキ科

亜熱帯系の植物で葉は厚くがさがさして楕円形で大きい亜高木です。５月頃、枝先につくあまり派手でない白い花の塊がつく落葉性の木で、蒲江のものは6～7mの高さです。

現在知られているのは葛原の峠に4本、お滝への道の左手に１本これが県内の総数です。このマルバチシャノキが確認されたのは40年も前になります。

2001年に発刊された「レッドデータブックおおいた」（絶滅のおそれのある野生生物）ではマルバチシャノキは最も絶滅の危険性の高い１Ａにランクされています。

グンバイヒルガオ

グンバイヒルガオ　ヒルガオ科

昭和10年頃に清原善太郎氏等の調査研究により元猿、小浦の浜ではグンバイヒルガオの生育が年により知られていました。

グンバイヒルガオは亜熱帯から熱帯の海岸砂浜に広く分布するヒルガオ科の植物で、葉は相撲の時に

用いる行司の軍配の形をしていて厚く光沢があります。花は赤紫、直径５～６㎝で夏から秋にかけ開花して浜を美しく彩ります。種子が海水により運ばれます。このため砂浜に打ち上げられた種子が発芽して生長しているのが現在、上浦、鶴見など県南海岸を中心に知られています、しかし冬の寒さで枯死してしまいます。現在マリンカルチャーセンターの保護指導もあってカルチャー側の浜を中心に次第に群落は回復してきています。冬の間なかば、砂に埋もれ、寒さと潮風に堪え、春にはまた延びてきます。

ハマナツメ　クロウメモドキ科

ハマナツメ

波当津の地区の道を下ると、左手に防風林があります。この防風林は貴重な植物が多くみられます。中でもハマナツメは大分県のレッドデーターブック（絶滅を危惧される野生生物を記載した本）に１Ａ（最も絶滅の危険度が高いもの）として位置づけられています。クロウメモドキ科の落葉性の低木で、実を食べるナツメに近い種類ですが、実は食べられません。葉の大きさと葉脈の形、枝に刺があるところなどナツメによく似ています。花は小さく黄緑色で目立ちません。実の形は変わっていて椀のような形をしています。分布は静岡県より南となっており沖縄、台湾から中国の南まで分布していますが全国的にも個体数が少ないようです。大分県では蒲江しか記録がありません。それも防風林などに３株と他に１～３株しか見つかってない貴重な植物です。

ハカマカズラ　マメ科

ハカマカズラ

ハカマカズラは葉の先が大きく切れ込み、広げると昔の袴を連想させます。豆の仲間で大型のつる植物です。海岸の林縁にみられ木の上を覆って繁ります。ハカマカズラは亜熱帯に広がる植物で花は５～６月頃、黄緑の花をつけます。実は4～8㎝で中に硬くて丸い扁平の豆ができます。これを数珠にすると言う話はお隣の宮崎県の島野浦で聞きました。沖黒島、深島にみられます。

ショウベンノキ　ミツバウツギ科

ショウベンノキ

清原善太郎氏に蒲江にあるショウベンノキのことを聞いたことがあります。木を切ると水が滴るので小便の木と呼ぶということです。深島の学校へ続く坂道を登っている時、ショウベンノキに出会いました。ミツバウツギの仲間で、重なり合うように対生についた三枚の濃い緑色の小葉があり、花期は５月の終わりに、多数集った小さな緑白の花をつけます。県内では深島と津久見島にみられます。

イソヤマアオキ（コウシュウウヤク）　ツヅラフジ科

イソヤマアオキ

コウシュウウヤクともいいます。常緑の低木で、葉はつやつやして三本の葉脈がはっきりしているので、見分けがつかないほど、ニッケイに良く似ています。しかし、ニッケイのような香りはなく、花は薄緑で小さく、実は５㎜ほどの球形であります。

分布は九州南部から台湾、中国大陸の南を経てインドまで広がっています。県内の記録は鶴見の大島と沖黒島、深島です。しかし、大島のものは現在生育が確認できていません、いつでも見られるのは深島だけです。深島の林では開花、結実します。

キキョウラン　ユリ科

キキョウラン

ユリの仲間で厚い艶のある革質の葉と、しっかりして岩場に根を張っているのでランと言う名がついたのだろうと思いますが、ユリの仲間です。

キキョウランは熱帯まで拡がる植物で豊後水道域の北限は津久見あたりまで記録があります。しかし、県南でも見かける場所は限られています。地下茎で岩場を這い、葉は硬く革質で長さ40～50㎝、幅15～20㎜。ねじれたように巻く。無毛である。５月頃から花茎を伸ばし、黄色のおしべの突き出した青紫色の花を細い柄の先に幾つもつけます。７月頃までみられ、その後、瑠璃色の実となります。

シタキソウ

シタキソウ（オキナワシタキヅル）　ガガイモ科

県南の海岸の林内にあるシタキソウはこれまでオキナワシタキズルと呼ばれていました。

シタキソウは花が開いても後ろに反り返らない。オキナワシタキズルは花がやや小さく、花びらは1.5㎝ほど、開いて後ろに反り返る。九州の南から亜熱帯まで分布するものはそりかえりますが、現在同種ということになっています。６月の中旬より白い花が咲き、７月の初めまで咲きます。

アオノクマタケラン　ショウガ科

アオノクマタケラン

アオノクマタケランはランという名前がついていますがショウガの仲間です。大形で高さ50～150㎝となります。花は６月から７月頃、茎の上部が伸び、これに穂状につく、白色で唇のように突きだした大きな唇弁にうす紅色のぼかし模様が入っています。実は１㎝前後、球形で赤く熟します。林内の樹陰にみられる多年草。深島をはじめ波当津などの良く保存された林内や谷斜面に群落をつくります。

「レッドデーターブックおおいた」ではアオノクマタケランは絶滅の危険性の高い１Ｂにランクされています。

アコウ　クワ科

アコウ

断崖の岩場、日当たりの良い山麓、時に神社、公園に大きな木があります。幹から気根を出す亜熱帯系の高木です。タブノキなどの樹上に生え、根を下に下ろし、大きくなってタブノキを周囲から締め付けて枯らしてしまいます。花季は５～６月で花実は小型のイチジク状です。県内の分布は佐賀関以南です。上浦から蒲江までの海岸にみられます。大島のものはアコウの林となっていて県の天然記念物になっています。桑野浦では防風林として利用されてきました。生活を語る生きた遺産です。

フジツツジ　ツツジ科

フジツツジ

山の斜面､主に岩場に生える低木で葉はヤマツツジに比較し小型です。

花はピンクから赤紫で小さく、雄しべは５本あります。３月の下旬より４月初旬に開花、このあたりでは最も早く咲きます。日当たりの良い崖や草地にみられますが、町内ではコメツツジと呼び、盆栽に掘ったりしてあまり見られなくなっています、しかし、コメツツジは高山に生える別種です。自生の仙崎のフジツツジが良く知られツツジ祭りがおこなわれています。

ヒュウガトウキ　セリ科

ヒュウガトウキ

県南の海岸の岩場にみられる植物です。大分県、宮崎県に分布と全国的には限られた種類です。海岸の草地斜面､路傍､崖に海岸の林縁に普通にみられます。高さ60㎝～１ｍ前後。茎はハマウドに比べ細く紫色を帯びます。葉は複葉で、７月～10月、散形花序で小さく目立たない小さな花が集まってつきます。

ハチジョウギブシ　ナガバキブシ　キブシ科

ハチジョウギブシ

落葉低木で海岸でみられます。山野では木々の芽の出始める３月頃に、前年よりすでに用意されていた花を開きます。穂状に枝からいくつも下がり花は目立ちます。ハチジョウギブシは花の付く枝・茎・葉など、内陸にあるキブシに比べ大型で

す。分布は八丈島から本州沿いに南下し、九州東岸に達していると考えられています。

ソナレノギク

ソナレノギク　　キク科

キクの仲間、ヤマジノギクの海岸型で、日当たりの良い海岸の路傍や岩場・浜などにみられる越年草です。茎に毛がなく、高さ30～80cm、花は大型で花季は９～11月(秋)、薄青紫で径４～５㎝。県内では県南海岸に分布が限られ、鶴見の間浦、蒲江の尾浦、葛原、波当津に多くみられます。ヤマジノギクは茎や葉の表面に毛があります。

マルバグミ

マルバグミ　グミ科

県南の海岸を中心に分布する低木です。葉は丸く大型で花も実も大きい。秋に花をつけ初夏に成熟します。半島や島の低木林に多くみられます。

ハマウド

ハマウド　セリ科

セリ科の大型の多年草、大きいものは背丈を越えます。海岸近くの藪や砂浜の上部にはえる。６～８月傘状の繖形花序に多くの実を着けます。海岸の低木林の林縁や道端にみられます。

ナシカズラ（ハマサルナシ）　マタタビ科

ハマサルナシとも呼ばれます。落葉つる植物、葉は大型でナシの葉に似ています。花は白色で秋にはキュウイを小型にしたような実ができます。海岸低木林の林縁にみられ、採取して食べていました。現在ではあまり取ることもなくなりました。岬の先端部、大島などに多くみられます。

ナシカズラ

ポッポと呼び採取して食べていました和製キュウイです。現在ではあまり取ることもなくなりましたが熟すと甘いです。

ハマセンダン

ハマセンダン（シマクロギ）　ミカン科

半落葉性の高木で亜熱帯まで分布します。海岸近くの林にみられ、この辺りのものは葉が秋には黄色く色付き落葉します。大きいものは直径１ｍを越えます。県南海岸に多く、公園や神社にも植えられています。

ソナレムグラ　ナデシコ科

県南の海岸の海に近い岩上に生える10㎝程の小形の植物、小さい白い花をつけます。島、岬の岩場の岩の間に生えています。

ソナレムグラ

オオイタビ　クワ科

暖かいところにみられます。ヒメイタビ・イタビカズラに比べ葉も実も大型で、特に実は直径３㎝になり、雌の株では実が黒く熟すと大変甘くなります。日当たりの良い斜面の岩場や石垣を被って生えています。

オオイタビ

ウスベニニガナ　キク科

海岸に近い山道、林縁、段々畑の道などにみられる柔らかい１年草です。高さ10～40㎝ほど、枝別れします。葉は茎を抱き、裏は紫色を帯びます。花季は８～10月（秋）、舌状花は薄紅色で可憐です。日当たりの良い県南の海岸近くの路傍や畑の隅などにみかけられます。

ウスベニニガナ

ハマオモト（ハマユウ）　ヒガンバナ科

海岸の砂浜上部にみられる多年草の植物です。鱗茎は大きく、茎は根元が玉状にふくらみ、高さ30～50㎝、葉は大きく長さ30～60㎝、幅４～９㎝、肉質。花季は７～９月（夏）です。50～80㎝の花茎を伸ばし、白い花を十数個つけます。

種子は水に浮き、海水で運ばれ浜に打ち上げられ分散します。種子は良く発芽し栽培は容易ですが、霜には弱いので注意が必要です。

ハマオモト

ネコノシタ（ハマグルマ）　キク科

海岸の砂浜上部に群落をつくる多年草です。茎は横に這い、途中根を出します。葉は厚く表面が猫の舌のようにざらつきます。花季は７～10月（夏～秋）、花は頭状花で舌状花は黄色。屋形島の東海岸砂浜には大きな群落があります。以前は海浜に多くありましたが次第に減っています。

ネコノシタ

オオカラスウリ　ウリ科

海岸の林縁、藪に生え樹木にからみ這い登ります。多年草で茎は無毛、蔓となり、長さ10ｍ以上伸びることもあります。葉は大型で大きく切れ込む雌

雄異株です。
花季は８～９月(夏)にみられ 実は楕円形で大きく長さ７cmあり、赤熟します。

オオカラスウリ

クルマバアカネ　アカネ

海岸の路傍、藪に見られる多年草です。茎はつるとなり強い逆向きの刺がある。葉は６～８枚輪生、葉は強くざらつきます。アカネは４枚輪生です。花季は８～10月（夏～秋)で小さな花をつけます。

クルマバアカネ

ハマクワガタ　ゴマノハグサ科

海岸に近い路傍、畑の縁にみられる１年～越年草です。茎は高さ10～15cmで直立し、枝分かれする。県内では1998年に鶴見で確認されましたが、その後、数箇所でみつかっています。４～５月(春～初夏)、花は小さく径２mmほどで目立ちません。

ハマクワガタ

メジロホオズキ　ナス科

海岸近くの山道、林縁にみられる多年草です。茎は高さ30～50cm、葉と共に細毛が密生します。花季は５～８月(夏)、花は白紫、実は赤熟し，光沢があって美しいです。

メジロホオズキ

キンギンナスビ　ナス科

路傍、荒れ地にみられる１年草です。茎は高さ10～30cm、茎は刺が密生します。葉は白毛があり、脈に刺があります。花季は８～10月(夏～秋)白色、中央は薄い黄色になります。実は緑色の縦筋があり、小形のトマトのように赤く熟します。古くからの帰化植物です。

キンギンナスビ

ミズネコノオ

ミズネコノオ　シソ科

田など湿地に生える多年草です、茎は高さ15～50cmで直立し枝分かれする。葉は細長く，長さ１～６cm、幅１～４cm。３～４枚が輪生します。花季は８～10月(夏～秋） で、花は穂状で密に着き，花は白色，穂全体紫色を帯びます。蒲江地区にみられます。

トキワカモメズル　ガガイモ科

常緑樹の林内、林縁にみられる常緑の多年草。つる植物で、葉は３～８㎝、披針形でやや堅く光沢があります。花季７～８月(夏)です。紫色ですが花はめったにみかけません。

イヨカズラ　　ガガイモ科

海岸の岩場、草原、路傍など日当たりの良いところにみられる多年草です。茎は直立し30～50㎝、花季は５～７月(初夏～夏)、花は白または淡黄色です。

イヨカズラ

ホウヨカモメヅル　ガガイモ科

ホウヨカモメヅルの花は暗紫色で先端がつる状に伸びます。はじめはイヨカズラに良く似ていますが、生長すると先がつるになり花を咲かせます。豊後水道域ではイヨカズラより多くみられます。

ホウヨカモメヅル

イワタイゲキ　トウダイグサ科

海岸の岩場、礫原上部にみられる多年草です。茎は長さ30～60㎝、細く生長すると這う。葉は８～11月赤く色づきます。花季は４～５月(春)です。岬の先端部でみかけます。

イワタイゲキ

ホウロクイチゴ　バラ科

ホウロクイチゴ

林縁、海岸藪にみられる落葉低木で茎は線毛を密生します。多数の刺があります。斜上し長く伸びると藪を這います。葉は裏表葉脈上に刺があり、裏は褐色の線毛があります。花季は４～５月(春)葉の脇から白色の花をつける。果実は赤く熟します。分布は海岸部に限られます。これに似て林内、林縁にあり葉脈の刺はなく、茎の立つものをオオフユイチと云います。

ツメレンゲ　ベンケイソウ科

海岸岩上　岩の割れ目などのわずかな土にみられる多年草です。葉は細く肉質、先は針のように尖ります。放射状に広がり、長さ1.5～３㎝、秋に塔のように立ち上がり穂状に多くの花をつけます。花季は　９～10月(秋)、白色の花をつけると枯れます。子株は親株の脇にでます。多肉植物として観賞用に鉢植えにしているものをみかけます。鶴御崎や丸市尾地区によく見かけます。

ツメレンゲ

ツクシキケマン　ケシ科

海岸に近い路傍、藪、林縁にみられます。越年草で茎は高さ40～60㎝、毛は無く、白い粉を帯びます。葉は２～３回羽状に分かれます。折ると悪臭があります。切ると黄色の汁が出ます。花は黄色で穂状につきます、花季は３～６月(春～初夏)。種子は数珠状にくびれます。

ツクシキケマン

ハチジョウイノコズチ　ヒユ科

島や海岸の崖、路傍に希にみられる多年草です。茎は高さ30～60㎝、茎や葉に毛がなく、葉の表面は光沢があります。島では冬も地上部が残ります。花季は９～10月(秋)、実は衣類につきます。大島、沖黒島にでます。

ハチジョウイノコズチ

サンヨウアオイ　ウマノスズクサ科

カンアオイの仲間です。林内にみられる多年草です。茎は節があり地中にあります。葉は三角形に近い楕円形、長さ５～10㎝、葉は光沢がなく、雲紋の出るものから出ないものまであります。花は地に潜るように下向きにつき、花季は３～５月で筒はくびれます。雄蕊６個、仮雄蕊は６個です。

サンヨウアオイ

タイリンアオイ　ウマノスズクサ科

林内にみられる多年草です。環境への適応性は強く、常緑樹林から杉林にもでます。茎は地中にあります。葉はより大きな三角形、長さ８～12㎝、葉は光沢があります、雲紋の出るものから、ないものまであります。花は地より上向きにつきます。花季は３～５月、黒紫色です。筒はくびれます。

タイリンアオイ

四国と豊後水道をはさんで両岸の植物は相対して同じ種類がみられます。分布の遅いカンアオイの仲間でサンヨウアオイやどんぐりができ重力分散するハナガガシ、それに仙崎にあるフジツツジなどです。今からおよそ15000年より前、最も寒かった最終氷期には蒸発した海の水は陸地に氷となって残り、海水が少なくなったといわれています。この時代は九州・四国・本州は陸続きであったとされていて、このとき連続分布していた植物が、その後、次第に暖かくなって海水がふえ、再び海で分断され現在に至っています。

ガンゼキラン　ラン科

谷に近い常緑樹林内や岩場に希にみられる多年草です。根元に古株のバルブがある。葉は１～５枚、長さ30～70㎝、幅４～７㎝です。花季は５～６月(初夏)で、高さ40～60㎝の花茎を出し、淡黄色の花をつけます。蒲

ガンゼキラン

江地区では稀にみられていましたが現在情報がありません。宮崎、鹿児島はありますが大分は絶滅寸前です。

ニラバラン

ニラバラン　ラン科

日当たりの良い斜面草地や河川の土手にみられる多年草です。高さ10～15㎝、柔らかく薄緑色。球根があります。葉は線形で１枚、長さ15㎝程度、花季は４～５月(春～初夏)。薄緑色の花が穂状につけます。

ナギラン

ナギラン　ラン科

保存の良い林の中に見られる常緑の多年草。地下茎があり、これに鱗片に包まれた小型のバルブが並びます。葉は厚く光沢がありナギの葉に似ています。長さ柄をいれて６～15㎝。花季は７月(初夏)花は黄白色で紫色を帯びます。生育地は少なくなっています。

オニツルボ

オニツルボ　ユリ科

岬の先端部や島にみられる多年草だが多くはありません。ツルボにくらべ大きく、葉は長さ10～30㎝、幅１㎝、やや肉質で柔らかい。花季は10月頃(秋) 、30～50㎝の花茎をのばし、ピンクの花をツルボより密に多数穂状につけます。島や上浦でみかけます。

ハマカンゾウ

ハマカンゾウ　ユリ科

海岸の崖､路傍、草原にみられる多年草。地下茎があります。葉は根元から左右に束になってでています。毛はありません。冬も青い葉が残り、花季は７～10月(夏～秋)です。70～90㎝の花茎をのばし、先に総状に暗橙赤色、橙赤色の花を次々に開きます。種子は５㎜ほどの黒い球形。ノカンゾウはハマカンゾウによく似ていて見分けにくいのですが、地上部は冬枯れること、花の下の苞は短く１～３㎝です。ハマカンゾウは３～10㎝です。ノカンゾウは少なくなっています。

ナンゴクウラシマソウ

ナンゴクウラシマソウ　サトイモ科

林内､林縁にみられる多年草、平たい球形の地下茎があります。その上部から根が出ます。葉は葉鞘の上に１個で、小葉は幅が狭く９～15に分かれます、長さ８～13㎝。花季は３～

５月(春) 、１～６㎝の柄の上に８～10㎝の仏焔苞とよばれるおおいの中に棒状で先が長く伸びる肉穂ができます。仏焔苞は黒紫色です。鶴御崎、波当津でみかけます。

シオカゼテンツキ　カヤツリグサ科

日当たりの良い海岸の海岸岩上にみられる多年草です、高さ10㎝前後、多数集ってロゼットとなります。株を作ります。葉はイソヤマテンツキより幅広く、幅1.5～３㎜。個体数は少なく、花季は８～10月(夏～秋)、花をつける茎の上部に多数の小穂をつけます。現在深島が産地です。

キノクニスゲ　カヤツリグサ科

島や海岸に近い林内にみられる多年草です。大きな株になります。葉は株もとに多数でます。幅８～11㎜、硬い。穂をつける茎（稈）は高さ30～40㎝、小穂は４～５個、途中の雌性のものは、長さ１～3.5㎝です。先に雄花の穂がつきます、長さ３～５㎝。花季３～５月(春～初夏)です。沖黒島、深島の林にみられます。

キノクニスゲ

オニシバ

オニシバ　イネ科

海岸の砂地にみられる多年草です。地下茎は砂の中を伸び、節から地上にでます。穂をつける茎（稈）は高さ５～10㎝、葉はやや硬く、長さ３～４㎝、幅６～８㎜です。花穂は棍棒状です。長さ３～４㎝、幅1.1～1.8㎜。花季　６～８月(初夏～夏)です。

オオムラサキシキブ　クマツズラ科

海岸に近い林、林縁にみられます。花季は６～８月(夏)紫色。葉は大きく10～20㎝です。ムラサキシキブは小さく６～11㎝です。ヤブムラサキは葉の表面ビロード状の毛があります。

オオムラサキシキブ

ヒゼンマユミ　ニシキギ科

島のタブ林にみられる常緑の高木樹高５～10ｍとなります。若い枝は緑色をしています。葉は長さ1.5～８㎝、幅１～５㎝革質で光沢があります。花は４～５月で黄緑色、実は秋に橙赤に色づきます。沖黒島や深島にみられます。

ヒゼンマユミ

ヤナギイチゴ　イラクサ科

海岸林縁に生える常緑の低木、枝を多く出す。葉は細い披針形３本の脈が目立ちます。花季は５月(初夏)、雌

雄が別の木、実が黄色に熟れると甘いのですが現在は食べる人はありません。蒲江では林縁や谷斜面に比較的に多くみられます。

ヤナギイチゴ

ビロウ　ヤシ科

島や海岸にみられる常緑の高木。断崖や林の中に生える。公園や学校などに植えられる。深島のものは人家の庭やすぐ裏手にあります。４本ほどですが過去に学校等に移植されたと言う話もあります。

米水津の竹野浦のものは人家の裏山にあります。島を除けば北限です。沖黒島は個体数も多くタブ林の中や、南側の切り立った断崖の上にあります。生育状態は大変よいです。２つは県の天然記念物になっています。県下では高島にもあります。

ビロウ

ウバメガシ　ブナ科

日本では唯一の常緑のナラ属、大きいものは樹高15mにも成長しますが、断崖の岩場に林をつくっているものは、10m前後の低木林となっています。昭和30年代までは、燃料や良質の木炭である備長炭となるため、伐採された経過があります。鶴御崎の断崖のものは切られてないが岩上のため生長は遅く樹高は低いです。大きいものは津久見の駅前と間越にあります。どちらも県の天然記念物になっています。

ウバメガシ

シオミイカリソウ　メギ科

多年生草本、高さ10cm前後、４～５月に白からごく薄いピンクの錨形の花をつけます。四国・九州東岸の海岸と分布は限られ、佐伯では鶴見半島では普通に、中浦から浦代峠、木立あたりまでみられます。

シオミイカリソウ

ノアサガオ　ヒルガオ科

朝顔の仲間は、中国から来た園芸品種の朝顔と野生のアサガオがあります。ノアサガオは後者で葉はサツマイモの葉に似て厚く、花は赤みのある紫色。５月より７月初めまでみられます。大分県では大島のものが唯一の産地です。島内全域に見られますが、田野浦・船隠には特に多くみられます。

ノアサガオ

ルリハコベ　サクラソウ科

草丈10～20cmほどの１年生草本、花は瑠璃色で直径１cm足らず。大正11年、田代善太郎が県南の植物調査で、大島に渡ったときの記録にルリハコベがあります。暖地から熱帯まで分布しています。

ルリハコベ

ひ弱な草であるが、環境があまり変化しなければ、草木は生き続けて行くものです。県内では姫島など１～３の生育地の報告がありますが、毎年みられるのは田野浦、船隠に見られ、年によっては群生しています。

ビャクシン

ビャクシン　ヒノキ科

常緑の針葉樹、イブキとも呼びます。北方系の植物で海岸の岩上にみられます。米水津の横島のものが南限になります。県内では佐賀関半島・大入島・鶴見半島・横島などに記録があります。 大入島のものは現在はっきりしません。 鶴見半島のものは先端部の断崖にみられ、1972年の天然記念物調査で生野・真柴によって鶴見半島の先端部に二カ所確認されています。

アマモ

アマモ　ヒルムシロ科

海水に適応した単子葉植物、リボン状の細い葉をつけ、内海の波の静かな砂泥地40～50㎝あたりの浅いところに群生しています。 藻場と呼ばれ、産卵場、魚の稚魚の住み場として、水産資源の上から大切な植物でしたが、近年生育地は減少しています。丹賀の湾内、島江にみられますが大島の田野浦海岸では大きな群落が消えています。

モクタチバナ

モクタチバナ　ヤブコウジ科

県南の海岸の島や半島に在りますが多くありません。暖かいところでみられ、津久見島あたりまでみられ、半島では鶴御崎まで多く見られます。分布は亜熱帯まで広がる。高手島・大島のアコウの林内に多く、有明の海岸低木林内にもみられます。

タキキビ

タキキビ　イネ科

林縁や山道にみられ、半日陰に群生する。県下分布が限られ県南の島にみられ、津久見島・屋形島・深島・大島などで確認されています。大島賀茂神社の森の周辺は特に多くあります。

ナタオレノキ

ナタオレノキ「ハマモクセイ」　モクセイ科

低木で、硬く鉈で切っても歯が折れるところから名付けられています。大分県では現在まで鶴見半島のものがあるだけです。宮崎県にはでます。

ハナガガシ　ブナ科

常緑の高木で胸高直径80㎝，樹高20ｍ以上になります。葉はアラカシに比べると長く、葉の表面の主脈が飛び出ているのが特徴です。樹皮は灰褐色で割れません。分布は九州、四国の南側で大分県では佐伯のものが北限です。城八幡社のものは国の、八坂神社のものは県の天然記念物となっています。

シマサクラガンピ

シマサクラガンピ　ジンチョウゲ科

岩場にみられる落葉低木、葉は卵形で互生です。花は８月新しい枝の木に黄白色の小さな花が集まって咲きます。尺間山や藤河内などでみられます。

ヒカゲツツジ　ツツジ科

山の岩場に見られる常緑の低木です。樹高30㎝くらいの小型のシャクナゲといったところです。花はうすい黄色、５月ごろ３～５個ほど葉の上に集まってつきます。

サツマルリミノキ

サツマルリミノキ　アカネ科

常緑の低木です。７月ごろ葉のわきに白い花をつけ、秋には瑠璃色に熟した実をつけます。ルリミノキは茎や葉に毛がありませんが、サツマルリミノキは毛が多く、保存のよい神社林などにみられます。

イイギリ　イイギリ科

落葉高木で谷に近い山腹にみられます。葉は心形，葉の先は尖っています。秋に葉が落ちると赤い実が房状について多く枝先に下がるのが遠くからでもよく見えます。轟峠には多いです。

イイギリ

トサムラサキ

トサムラサキ　クマツズラ科

落葉低木高さは５ｍほどになります。７～９月葉のわきに枝を出し薄紫の花を多数つけます。秋には球形の紫色の実をつけます。葉の先が尾状に長く伸びるのが特徴です。珍しい種類で青山国有林の周辺にみられます。

オンツツジ

オンツツジ　ツツジ科

落葉低木、花は橙紅色の大型で葉より少し先に出ます。尾根や山腹の日当たりのよいところに生え県南のアカマツ林の下に多く見られます。宇目など山間地に多いのですが、蒲江地区にも見られることがあります。

ヘッカニガキ

ヘッカニガキ　アカネ科

落葉高木で亜熱帯まで広く分布をしています。県内での分布は県南が中心です。葉は卵形で対生であります。花は淡黄色を頭状につけます。

ボウラン

ボウラン　ラン科

常緑の多年草で岩上や樹上に着生します。全体緑色の棒状で肉質です。花は暗い紫色で目立ちません。湿度の保たれる水辺の樹木に着生がみられます。

シラン

シラン　ラン科

岩場や崖地などに見られる紅紫色または白色のランで群生しているのを見かけます。丈夫で繁殖力も強く庭や路傍に植えているのを見かけます。野性は減少しています。

セッコク　ラン科

常緑の多年草で多肉質の茎が群生して樹木や断崖の岩場にあります。５月白色でわずかに紅色を帯びた花を咲かせます。昭和40年以前はまだ周辺の山には多く見られました。しかし、花屋やみやげ物売り屋にミズゴケに包みシュロで巻いた花が出るようになると急速に減少していきました。

タコノアシ　ベンケイソウ科

田の周辺や水辺の湿った場所にみられます。高さ50～70㎝くらいになります。花は９月頃から茎の上が四方に別れ黄緑色の小さな花をつけます。実は嘴状の棘ができ、これを吸盤にみたて、タコノアシと名付けたようです。以前はあちこちで見かけましたが次第に少なくなっています。

タコノアシ

セキショウモ　トチカガミ科

淡水に見られる水生植物です。川底の土に根をはり、群生します。葉は細く谷に生えるセキショウに似ています。

セキショウモ

ミクリ

水中で花をつけ実ができるころは長い柄がくるくるとばねのように巻きます。番匠川や堅田川の中流域にみられます。堅田川には流水域に特に広く生育しています。しかし、大分県内ではほかに見当たりません。

ミクリ　ミクリ科

水辺に生える多年草で番匠川水系の中流域にみられます。高

さ１ｍほど、夏に枝分かれした柄に穂状の花をつけます。秋には棘のような突起のある球状の実をつけます。

同じ仲間のナガエミクリは池や溝にありますが、穂は枝分かれせず最初の実は１～３㎝の柄をつけます。弥生の田園の溝や川にみられます。ヒメミクリは池などに見られますが県南では蒲江の池に生育していましたが、池の面積減少により絶滅が心配されています。

ヒメバイカモ

ヒメバイカモ　キンポウゲ科

川の清流に見られる水草です。葉は糸状に別れています。梅花といわれるように白い五弁の花をつけます。次第に減少していて現在大分県では堅田川にみられるだけです。

タニジャコウソウ

タニジャコウソウ　シソ科

保存のよい森の谷の林に見られる多年草です。高さおよそ60㎝くらい、８月ごろ淡紅色の長い筒状の花を葉の脇に２個ずつ付けます。

ケイビラン

ケイビラン　ユリ科

岩場に生える多年草、葉は雄鶏の尾羽に似た形状になります。ソハヤキ系の植物と呼ばれ中央構造線の外帯に分布しています。暁嵐の滝や傾山系でみられます。

オガタマノキ　モクレン科

常緑の高木、自然には稀で、神社などに植えられています。「招魂の木」と書かれ、果実は祭事に使う鈴に似ています。花の径3㎝ほどで白色、春に咲きます。

シロバナハンショヅル

シロバナハンショヅル　キンポウゲ科

石灰岩地にみられるつる植物です。葉は３出複葉です。花は白色で花弁は４枚です。５月頃咲きます。

オオクサボタン

オオクサボタン　キンポウゲ科

石灰岩地の岩場に生えます。葉は３出複葉で、９～10月に紫色の花をつけます。茎の下のほうは硬くなっています。

ムカデラン　ラン科

岩や樹皮に着生する小型のランで、茎は這い葉で肉質です。５月頃薄紫の小さな花をつけます。上浦で古くから記録があり現在も少数残っています。

ヒュウガギボウシ　ユリ科

渓谷の岩場や崖に生える多年草です。20～50㎝ほどの高さになり、花は９月頃、薄紫色の花を花茎の上方につけます。

ヒュウガギボウシ

ヤハズアジサイ　ユキノシタ科

高さ2～3mの落葉低木です。葉の先が矢はず方に切れ込みます。夏季は７～８月で枝先に房状に白色の花をつけます。

ツクシアケボノツツジ　ツツジ科

山地の尾根や斜面にみられる落葉低木です。葉は５枚が輪状につきます。４月の終わりから５月に桃色の花をつけます。葉の出る前に花が咲くので目立ちます。

ツクシアケボノツツジ

キリ　ゴマノハクサ科

藤河内の渓谷沿いの山にあるキリが　自生かどうか問題になり調査が行われたことがあります。現在「野生のキリ」ということで県の天然記念物になっています。

キリ

シダ類はイシカグマ・オオイワヒトデ・タマシダ、ナガバイタチシダなど多く、コウラボシ・ハマホラシノブ、ニセヨゴレイタチシダ、リュウビンタイなどの暖地性の珍しい種類があります。石灰岩地にはホウライクジャク、タチデンダ、クモノスシダ、キドイノモトソウなどがみられます。

コウラボシ

海岸の林内の岩場や石垣に着く、ノキシノブに似た小型のシダ。県内の分布は限られています。鶴見半島、蒲江地区の海岸の岩場に見られます。

ハマホラシノブ

ハマホラシノブ

日豊海岸の島にでる。現在県内では、深島と大島にだけ確認されています。大島のものは田野浦・船隠の海岸に近い岩場に生育するが多くありません。

クモノスシダ

石灰岩地に見られる、以前は本匠にも少数あったが、人の手が加わって消えてしまいました。藤河内林道に群生地があります。

クモノスシダ

タチデンダ

石灰岩地域の谷の壁のわずかな土に数株が見られるだけです。

タチデンダ

Ⅳ　壊れる自然と消えていく植物

植物とかかわって50年、その間にも消えて行くすばらしい森や植物を見てきました。人の生活は自然を利用、改変して向上してきました．それは現在加速的に早まって来たという実感があります。そして貴重な自然も次第になくなっています。

消えたシオジの原生林

宇目の藤河内地区の入り口より七年山の麓に林道が延びていました。少し古い話ですが1983年のことです。

祖母傾国定公園学術調査でこの林道を登りさらに、進んだとき谷を覆った見事なシオジの森に出会いました。径80㎝から１ｍほどのシオジの木が谷の奥深くに続いていました。海抜700ｍから上流950ｍほどもありました。林内はチドリノキ、アブラチャン、ヤハズアジサイ、サワグルミ、林床はミヤマクマワラビ、テバコモミジガサ、ミヤマタニソバ、ジュウモンジシダなどが茂り大きな岩が重なって谷はコケが岩を覆っていました。まさに悠久の神秘な神の森の趣でした。

ところが、この森はすっかり切られてしまったのです。私たちが登った整備された林道はシオジの森を切るためのものだったということが後でわかりました。

再び、ここに登る機会がありましたが、数年後私たちの見たのは、消えたシオジの森の代わりに、崩落した土砂となぎ倒され谷を埋めた斜面の木でした。

川からホテイチクの林が消える

今では、すっかり少なくなりましたが、昔の番匠川の岸には殿様が奨励して竹を植えさせたのです。大水が出たとき川が氾濫しても竹やぶの向こうの田畑にごみなどが流れ込まないように、また水の流れも緩やかになるようにしたいと考えたからです。

これは支流の堅田川、井崎川，久留須川なども同じです。番匠川の中流域を中心にホテイチクの林があります。地域の人々はこれをゴサンチクと呼んで大切にしました。春にはたけのこができました。竹は杖や釣り竿、竹細工に利用されました。なにより水害のとき木やごみが田畑に流れ込むのを防いでくれました。アユやハエ（オイカワ、カワムツ）の産卵や稚魚の生活には役に立ちました。

沼の埋め立てで変わる湿地の植物

湖沼の汚染や埋め立てによる自然の破壊は以前からマスコミなどで取り上げられてきま

した。佐伯市は古くからの湖沼は少なく、ダムや水田のための溜め池などが知られていました。蒲江の州の本の沼は海岸に隣接し、以前の水田の跡に水がたまってできたものでした。しかし、耕作をやめて数十年が経過し、周囲が山に囲まれて、人の出入りもなかったため、周囲に水辺を好む植物が良好な景観をつくつていました。

ヒメミクリ

ハンゲショウは沼の周囲を覆って茂り、水辺は山側にテキリスゲの群落が、中央はホソバノウナギツカミ、ホソイ、カンガレイなどの茂りが岸よりせり出していました。海岸側は植えられたクヌギ、と自然に芽を出したハマビワやヤブニッケイが海よりの潮風を防ぐ防風林の役目をしていました。周囲の山の木立や植えられたクヌギの並木が水に映り、得がたい優美な景観をつくっていました。トンネルなど道路工事での排土の捨て場の候補地となったということで、県の調査がおこなわれました。結果、湿地で73種、周囲の林、林縁で117種合計88科215種が記録されました。

湿地の中央部はホソバノウナギツカミ、ホソイ、コウガイゼキショウ、カンガレイ、サンカクイ、クロクワイ、ヒメミクリ、ヒメガマ、セリ。湿地の周囲のハンゲショウの群落のあたりはチドメグサ、ノチドメ、ミズユキノシタ、ハマクワガタ、ミズハコベ、スズメハコベなどがみられた。周囲野山は谷にスギの植林があり林内はネズミモチ、ヤナギイチゴ、ハドノキ、イヌビワ、コショウノキなどが多く林床はオオイワヒトデ、イワヒメワラビ、オキナワシタキズルがありました。

湿地は水辺の植物のうちハンゲショウやヒメミクリ、サンカクイ、スズメハコベ、ハマクワガタ、林内ではヤナギイチゴが県内でも自然から減少している貴重な種類で絶滅危惧種に指定されていました。特に、ヒメミクリは久住山系の沼などに見られ、県南にはない種類でありました。

この植物を残すための方策が話し合われました。移植も検討されたが、移す水辺がありませんでした。新しく付近に池を造る案もありましたが、なかなか実現が難しかったのです。地権者の意見の聞く会が幾度かもたれました。埋め立ての時期は刻々と迫っていましたので、とりあえず埋め立て予定の中央の貴重種を沼の片隅に移すことになりました。大きなシャベルカーで生育地を丸ごとすくい池の北側に移植地が確定するまで移しました。試行錯誤の３年をへて、移植による保護は限界があるだろうということで、地区の人々の協力を得て池の北側を一部残して保護することにしました。狭くなった池で水と微妙な湿度を維持し、今後種が残っていくか注意深くみていく必要があります。

高速道路工事で減少する貴重種の保護

九州高速道路の工事で環境調査が行われてきましたが、特に蒲江地区の丸市尾と波当津にはミズネコノオ、ナギランなど、それに最近命名されたニッポウアザミの大分県生育地など貴重植物が影響受けるということで、その対策が考えられてきました。

特に波当津はトンネルの排土の置き場として休耕の田と谷が埋められることになっていました。結果、埋め立て予定地の中で次の植物が絶滅危惧種に指定されているため移植することになりました。ニッポウアザミ、コクラン、エビネ、ミズネコノオ、カモノハシ、

イズハハコ、オキナワシタキズル、ヤナギイチゴなどです。
　埋め立て予定地の北側の谷に移植地の候補を作り、一部ネットに囲んで2007年に移植が実行されました。
　ニッポウアザミは移したものの半数ほどの20株ほどが残り移植は成功しました。埋め立ては終わり、高速道路と取り付け道路が、かつて田畑のあった谷の上に伸びていいます。新しい埋立地ができたら、移植地から戻すことが考えられています。現在計画は進行中ですが、今後数百本あったアザミがどの程度復元するかみていきたいとかんがえています。

趣味による人の採取で絶滅する植物

　現在野生の種が全滅するのに大規模開発などより、人による採取が大きくかかわっているものがあります。
　花の美しいユリやオキナグサ、キクの仲間などがそうですが、特に個体数の少ない、希少種であるランの仲間は影響が大きいです。佐伯市でもガンゼキランなどが県内唯一の産地から全滅したのではないかと云われていている。
　ガンゼキランは蒲江地区では、複数生育地点で確認されていましたが、最近ほとんどみられなくなっています。これまで丸市尾の谷に３株ほどあるのが知られていました。それが2007年頃から見られなくなって大分県のガンゼキランの生育地はなくなったと思われましたが、2012年にみつかっています。
　同じように多かったのに最近極端に少なくなったものにクマガエソウ、セッコク、ナゴラン、フウラン、ウチョウラン、キンランなどです。

自然をほごする活動

　自然を調べこれを保護していこうという活動も大変活発になりました。2004年より始まった国の生物多様性国家戦略、国交省の水辺の生物調査などがあり、大分県のレッドデータ絶滅危惧生物調査佐伯でも私たち「城山の植物を調べる会」は身近な自然に関心をもって、自然を守って行こうと30年以上にわたり活動を続けてきました。
　４月から11月までがみんなで自然をめぐります。会員は60名です。観察会の報告は佐伯の植物は写真を添え「便り」を出して会員に配布しています。

絶滅危惧種の県指定の中の佐伯の絶滅危惧種

　国の絶滅危惧生物の調査指定に続き、県の自然調査と絶滅危惧生物の指定のため1999年から始まり2001年に「大分県版レッドデータブック」が完成しました。５年ごとに見直しが行われ、すでに10年経過したので2011年に見直しが完了しました。この中で佐伯に生育する種類は次のようなものがあります。

ＩＡ類　ごく近い将来絶滅の危険性が極めてたかいもの

　コメガヤ、カンザシギボウシ、キエビネ、クマガイソウ、ニラバラン、ウチョウラン、ナゴラン、ヒメバイカモ、ハマナツメ、ウバタケニンジン、ナタオレノキ、グンバイヒルガオ、マルバチシャノキ

ＩＢ類　ＩＡ類ほどではないが、近い将来絶滅の危険性が高い種

　ササバモ、シバナ、ウミヒルモ、ミミガタテンナンショウ、ベニカンゾウ（ノカンゾ

ウ）ウンヌケモドキ、ハイキビ、ウバタケギボウシ、アオノクマタケラン、ヒナラン、エビネ、ユウシュウラン、ムカデラン、ナギラン、タシロラン、アキザキヤツシロラン、ムヨウラン、ボウラン、フウラン、ハナガガシ、コケミズ、ツチトリモチ、シロバナハンショウヅル、アサザ、ヤマシャクヤク、コウシュウウヤク（イソヤマアオキ）、タコノアシ、コミノヒメウツギ、カワラサイコ、ハカマカズラ、クズモダマ（カマエカズラ）、ヒゼンマユミ、ショウベンノキ、ノアサガオ、ミズネコノオ、ナミキソウ、スズメハコベ、イヌノフグリ、イヨアブラギク、カンサイタンポポ、ハマグルマ

Ⅱ類　絶滅の危険性が増大している種

ハリモミ、ヒノキ、ミクリ、ナガエミクリ、ヒメミクリ、コアマモ、セキショウモ、ハイチゴザサ、ケカモノハシ、カモノハシ、ウマスゲ、キノクニスゲ、サンカクイ、ビロウ、キキョウラン、ヒメヤブラン、マメヅタラン、キンラン、ムギラン、セッコク、ベニカヤラン、クモラン、ハンゲショウ、サダソウ、イヌヤブマオ、コギシギシ、ハマツメクサ、オオクサボタン、ツクシチャルメルソウ、ミヤマトベラ、ウドカズラ、ケサンカクヅル、ハマボウ、ヒカゲスミレ、ミズマツバ、フサモ、ヒュウガトウキ、ウメガサソウ、ヒュウガミツバツツジ、ハマサジ、シノノメソウ、トサムラサキ、ショウロウクサギ、タニジャコウソウ、コナミキ、キクモ、ウラギク、ソナレノギク

準絶滅危惧種　　現時点では絶滅の危険性は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

コウボウムギ、ナンゴクウラシマソウ、ケイビラン、ハマカンゾウ、ヒュウガギボウシ、オニツルボ、シラン、ギンラン、カヤラン、ヤナギイチゴ、ボロボロノキ、オオバヤドリギ、タイリンアオイ、サンヨウアオイ、ハママツナ、ハチジョウイノコズチ、コウホネ、ナガミノツルキケマン、モウセンゴケ、ツメレンゲ、アワモリショウマ、イワタイゲキ、オニシバリ、シマサクラガンピ、ツクシシャクナゲ、ヒカゲツツジ、ツクシアケボノツツジ、ミヤマコナスビ、センブリ、スズサイコ、スズコウジュ、ミゾコウジュ、カワジシャ、ルリミノキ、サツマルリミノキ、ミサオノキ、ヘッカニガキ、フクド、テバコモミジガサ、イズハハコ、アシズリノジギク、

すばらしい自然のひとかけらを次の世代に残す

急速な科学の進歩によって生活はたいへん便利になりました。井戸から水を汲み、薪で炊事をしていたことが昨日のようです。自然も急速に変化しました。トンボを追いかけ、オタマジャクシをすくった水辺も閑散とした外国からの草に覆われたところになりました。カブトムシやイモリはデパートにいますと答える子どもたちを笑えますか。

豊かな自然を子孫に残すため、ひとかけらの自然を大切にして、こんな世界が100年前まではどこにでもあったことを知らせるだけでもまにあいます。このたびのささやかな冊子が皆さん自然への関心に役立つことを期待いたしています。